

大学教育の質を高めるための高大連携のあり方*

—英語の前置詞の学習を例として—

花 崎 一 夫

花 崎 美 紀

1. はじめに

高大連携は、1999年に中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」がだされ、そこで文部科学省が高大連携の推進の姿勢を初めて明確に打ち出したのを契機に、全国で急速に取り組みられるようになった。この答申には、大学での授業を受講しそれを高校の単位として認定することや、大学において高校の協力も得て補習授業を行うことなど、具体的な連携の方法が示されており、そこで推奨された方策を取り入れた多くの取り組みを生んだ。これらの取り組みは一定の成果を上げていると評価できようが、同時に、発段階階にみられる様々な問題点をはらんでいる。本稿では、それらの問題点を解決しうのような、大学教育の質を高めることを視野に入れた「双方向型高大連携」を提案し、その試みとその成果を、英語学習者が最も学習しにくい学習項目の一つである、英語の前置詞の学習を例に挙げて報告を行うものである。

ここで提唱する「双方向型高大連携」とは、単に多くの高大連携にみられるような高校と大学の「接続教育」を目的とするのではなく、大学教育の質を高めることをも目的とすることにより、主に大学側からみた問題点を解消しうるようにプログラムした。これは、「大学生と高校生」、「大学教員と高校教員」、「大学教員と高校生」、「高校教員と大学生」の間の双方向コミュニケーションが可能なコラボレーションであり、これを通じて大学教育の質を高めようとする斬新な試みである。対象者は、大学生は信州大学人文学部で「英語科指導法」の授業を受講している学生であり、関係した大学教員は同大学の英語学を専門とする教員である。一方高校生は、長野県松本県ヶ丘高等学校の生徒であり、関係した高等教員は同高等学校の英語担当教員である。大学生が高校生に英作文を指導するというのを軸に、高校側と大学側が互いに、波及的教育効果と教育の質を高めるための仕組みを作り、実践した。

本稿は、第2章で高大連携の現状および問題点を明らかにし、この問題を解決しう「双方向型高大連携」を提案し、第3章ではそのコラボレーションの実践報告、特に英語の前置詞の学習効果について考察を加え、結果として、この高大連携は従来行われていた高大連携の問題点のいくつかを克服し、加えて大学教育の質を高めることを可能にしたことを明らかにする。

2. 高大連携の現状及び問題点と、それらの問題点を解決しうる双方向型高大連携の提案

高大連携活動は、現況では、高校と大学の「接続教育」を行っていると言えよう。それらは主に、中教審答申にあげられるような、「大学等での授業履修・課題成果に対する単位認定」、「科目等履修生や聴講生などの制度利用」、「大学教員による講義等実施」などによって行われていることが多い。具体例を一つあげると、明治大学では「プレカレッジプログラム」を実施しており、この名前が示すとおり、高校生に大学の授業を体験してもらい、それを高校の単位として認めている。

このような取り組みは、大学にもそして高校にもメリットのある活動として理解されているようである。大学側では、高校側に大学を知ってもらうという広い意味での入試広報活動の一環として位置づけられていることが多い。また高校と連携することにより、高校生の実情や大学教育への期待を大学側が知り、そこで得られたものを大学教育活動の改善に生かしていくことが可能である。そのために、大学側に専門のオフィスを作って対応している場合が多い。(例：九州大学の九州大学高大連携推進専門委員会、立命館大学の高大連携推進室など) 一方高校側にとっては、高校生へ刺激を与えることで高校生の進学熱を高めたり、大学との関係強化が図れる機会が与えられることがメリットとして挙げられる。さらに、「学力の向上が停滞しかねない」、「学習意欲が維持できない」などの、最近よく取り上げられる問題点の解消策として位置づけている連携も多いようである。(福岡 2002)

上述した大学・高校双方のメリットを裏付けているのが以下の表1である。表1は、大学・学部決定時に影響を受けた要因と大学満足度の関係を表しているものであるが、その中でも、「大学説明会・公開授業」は、大学・学部決定時に最も影響を受けた要因の一つであり、さらに、その要因によって大学・学部を決めた学生は、大学に対する満足度が高いことがわかる。

表1 大学・学部決定時に影響を受けたものと大学満足度の関係¹

		大学満足度					後輩への 勧め度
		総 合	施設設備	進路支援	教 員	授業教育シ	
と て も 影 響 を う け た も の	大学の教育理念に共感	161.0	153.1	205.8	199.2	228.4	190.7
	大学説明会・公開授業	134.2	130.7	143.0	149.6	156.3	147.6
	先輩の勧め、体験談	132.6	120.4	136.4	141.2	146.3	151.7
	大学HP	129.8	139.4	171.8	150.2	169.6	143.7
	進学情報誌	119.8	117.3	129.8	124.3	138.0	129.8
	入学案内・パンフレット	119.2	127.1	136.3	125.3	133.3	128.3
	高校の先生の勧め	106.7	100.8	103.2	118.8	113.6	37.3
	家族の勧め	105.7	101.7	117.6	107.7	103.5	38.7
友人も受験する	87.8	101.9	103.3	84.8	99.7	30.8	
全体集計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	32.9	

(ベネッセ文教総研「大学満足度調査」2001年5月)

*数値は指数表示：「とても満足(勧めたい)」%+「まあ満足(勧めたい)」%×0.5

■ =全体集計値よりも120%以上満足指数が高い / □ =同80%以下

一方で高大連携は、この数年間で飛躍的に広がったため、多くの問題点を抱えているのも事実である。特に、以下の3点が問題点として挙げられるであろう。(1) 高校生

は、高校の授業が終わってから参加することが多いので、放課後あるいは土曜日に大学の授業を受けることになるが、放課後は完全学校週5日制の実施に伴い時間割に余裕がないために参加が難しいし、土曜日は部活動を行っている学生は参加しにくい。

(増子 2002) (2) 高校への出前授業は、大学教員と高校教員との個人的なつながりによるボランティアで行われていることが多く、従って結果的にごく一部の教員に負担が集中し、かつ、高大連携事業に参画する大学教員に対する大学からの評価が低いために、事実上ボランティア活動になってしまうことが多い。(淵田 2004) 上述のよく指摘される2点の問題点に加え、我々はさらにもう一つ問題点があると分析している。すなわち、(3) 従来型の高大連携は高校生の学力向上が主眼になっており、そこには大学生の学力向上を目指すという視点が欠けている。では、以上の問題点を解決するにはどうしたらいいのであろうか。

上述の問題点(1)を解決するためには、お互いのところ(大学及び高校)へ出かけていく必要の少ない高校と大学間のコラボレーションを実現することが必要である。

また、(2)(3)の解決のためには、大学生を参加させ、大学生の学力向上を目指した高大連携を構築する必要がある。そもそも一般的な高大連携は、大学生の教育効果といった点にまで広げて考えるまで至っていない。これを考えて実践しているのは、我々の知る限りでは関西大学の「学校インターンシップ」の取り組みだけである。この取り組みは、教職課程をとっていない学生でも、地域の中学・高校においてインターンシップを行い、中学・高校生への刺激になると同時に、大学生の学力向上も目指している。(平成17年度教育GP採択) 関西大学高大連携運営委員長(関西大学学長補佐)の品川氏曰く、「学校インターンシップを始めた当初の趣旨は、教員志望者に就業体験の場を提供することだった。卒業年次に行う教育実習では、教員としての資質を試し、動機を持続するには遅すぎる。しかし、関西大学では、学校インターンシップ生の対象を教員志望ではない学生にも広げている。というのは、この取り組みは人間形成に目を見張る効果をもたらすことがわかったからだ。その理由は、若者はより若い世代に接することで急速に責任感を身につけていくところにあると思われる。企業や行政の現場でのインターンシップがおとなに立ち混じり、社会に順化していくプロセスだとすれば、学校インターンシップは学生が年少者を世話することで自分の成長の過程を振り返り、年長者として自覚し、自分自身の今後に目を振り向ける契機である。そこには学生を大学の内部に囲い込むことでは得られない教育効果がある。」(品川 2006) このように大学生の教育効果を考えた上で具体的にプログラムを組めば、上の問題点の(2)及び(3)は解決するであろうと思われる。すなわち、高校との連携を利用した大学生の教育という目的を持つことで、プログラムに参画する価値を見いだす大学教員が増え、(2)(3)の問題が解決するのと考えられる。

そもそも高校生を教えるという形で大学生を「双方向型高大連携」に組み込むことは、大学生のモチベーションを高めることに寄与する。モチベーションの重要性

は、学習内容自体の重要性が認識されるような動機付けが必要であることを指摘した、堀野・市川(1997)でも強く主張されているとおりである。また、当初関心をあまり持っていない課題であっても、やり方によっては徐々に関心が増すことも十分にありうる。具体的には、外的報酬によって内発的動機付けを高める「促進効果(enhancing effect)」が得られ、徐々に課題に対する関心が増すということは、Calder and Staw (1975); McLoyd (1979); Loveland and Olley(1979)の研究で明らかにされている。したがって、英語が得意でないが故にあまり英語学習に積極的でなかった大学生にとっては、高校生に対して指導を行いその実績を評価してもらい、といったいわば外的報酬によって内発的動機の促進効果が得られ、結果として英語力が飛躍的に向上することも十分に考えられるのである。一方、将来教職に就くことを念頭に置いている比較的モチベーションの高い学生にとっては、高校生に対する指導を行うことが将来の目標と密接に結びついているといえる。したがってこういった学生は、可能自己(possible self)という概念を提唱した Markus and Nurius (1986)でも主張されているように、外発的動機付けというよりもむしろ内発的動機付けがすでになされ、自己形成が他の学生よりもすすんだ状態にあると言えるので、高校生の指導が大学生本人の実力向上に直接的に結びつきやすいと考えられるのである。

また、大学生の教育効果をねらい、大学生を高大連携に参画させることで、さらに一つ副次的な効果が現れる。表1から明らかな通り、高校生の大学・学部決定時に最も影響を及ぼした要因の一つに、「先輩の勧め・体験談」というものがあり、この要因は、大学への満足度につながることを示されている。大学生を高大連携に積極的に参加させることは、とりもなおさず、大学生が高校生にふれあう機会が増えることになり、高校生にとっては、先輩の生の体験談が聞ける貴重な体験を得ることになる。この点を見ても、大学生を高大連携に参画させる意義は大きい。

よって本稿では、以下の要件を満たす双方向型高大連携を提案するものである。

(1) 本稿が提案する双方向型高大連携

- a. 目的は、次代の知的継承者である高校生の「接続教育」のみならず、同じく次代の知的継承者である大学在学学生への教育、そして社会貢献とする。
- b. 高校生だけでなく、大学生も参加できるようなプログラムとする。
- c. プログラムは、出前授業、高校生の大学授業への参加、インターネットを活用し大学に来なくてもコラボレーションできる制度など、様々なプログラムから成り立つ総合的なプログラムとする。

3. 双方向型連携としての取り組みの報告

信州大学人文学部英語学分野と長野県立松本県ヶ丘高校は、2006年4月11日にコ

ラボレーション協定を結び、以下の4点において連携を行うことになった。(一部4月以降追加)

(2) 「信州大学英語学分野と長野県立松本県ヶ丘高校コラボレーション協定」
4つの柱

- a. 県ヶ丘高校英語科の希望する生徒に対し、英作文を添削するチューターシステムを導入することにより、高校生の英語運用能力を向上させるとともに、教員を目指す学生の指導力をあげる。
- b. 県ヶ丘高校英語科の授業を年に数回(4回の予定)訪問し、高校の英語教育の現状を知るとともに、高校側の生の声を聞き、英語指導案を作成する際の参考にする。また、その指導案をもとに、高校生相手に模擬授業を行う。
- c. 信州大学から出前講義を行う。
- d. 信州大学学生が、県ヶ丘高校の学生の進学相談に応じる。

参加する大学生については、「英語科指導法」を受講している学生に限定した。第1の理由としては、教育実習に行った後の教育実習事後指導に参加する学生から、初めて教育実習に行くときとまどいを覚え萎縮してしまうという数多くの報告を受けており、教育実習に行く前に、「教える」という立場から、高校の授業を見る経験を作る必要があると考えたことが挙げられる。第2の理由としては、初めて高大連携を推進するのに、高校生を教えることに意欲がある学生を参加させたコラボレーションにしたいという思惑があったということが挙げられる。

上記の4点においてコラボレートすることを通して、第2章で明らかにしたこれまでの高大連携が抱える問題点を解決しようとするような、双方向型高大連携を実現しようとしている。大学と高校が連携し、地域全体で次代の知的継承者を育てることを目標とすると同時に、内発的動機を高めて、大学生の英語学習意欲を高めることを目指したのである。次に、具体的にどのようなことを行い、それがどのような結果をもたらしたかを報告することにする。

3.1. 英作文のコラボレーション

<<期待される成果>>

大学生にとっては、人の英作文を添削することを通して自分の英語力を上げると同時に、指導力をあげ、さらには高校生がどのような間違いをおかしやすいのかを知ることを通して、将来行う教育実習に役立てることができるであろう。

高校生にとっては、英作文を大学生に添削してもらうことによって家庭教師に見てもらふようなきめ細かい指導を受けることが可能になり、直接英語力の向上につながる事が期待できる。

<<このコラボレーションの工夫>>

いろいろなコラボレーションの方法があった中で、英作文におけるそれを選択した理由には次の3つがあげられる。第一に、正解・不正解を決定するのが比較的容易であること。第二に、大学の研究成果を指導の中に取り入れ易いということ。そして第三に、高校の授業外でできることである。

次に、英作文のコラボレーションにおいての大きな工夫についてだが、一つの英文法項目について1ヶ月の時間をかけたという点である。英作文の添削は、上記の通り、大学生にとっても高校生にとっても能力向上が期待できる。ところが、大学生の英語能力の不足が原因で間違った添削をしては逆効果であるので、以下のように、一つの文法課題を4週間完結にし、4ステップを踏んだ。

(3) 英作文添削の4ステップ

大学側で行うこと

高校側で行うこと

- | | |
|---|---------------|
| [1] 当該英文法項目の教員による大学生への説明 | 指定問題の英作文 |
| [2] 高校生に出される問題を含む数多くの問題を
解き、それを答え合わせする | |
| [3] グループで高校生の英作文添削 | 英作文の添削済解答受け取り |
| [4] 高校生の英作のエラーアナリシス | |

大学生にとって、高校生の英作文を添削する前にその文法箇所についての説明を教員から受けることで、高校生に何を指導すればいいのかが体得できるようにプログラムされ、かつその問題を実際に自分で解いてみることを通して、何がわからずどういった間違いを起しやすいか、そして、大学生自身で解いた問題を答え合わせすることを通して、どのように指導すればいいのかも体得できるようにプログラムされている。このように実際に高校生の英作文を添削する前に、何を指導すればいいのか、どこに気をつければいいのかを体験することを通して、間違った添削をすることが減り、高校生の英語運用能力の向上に寄与できたとと言えるであろう。

<<具体例の報告>>

前置詞は、高校の英語の授業において、リーダーの授業の中で説明が加えられることはあっても、前置詞一語をとりあげてそれについて詳しく1時間かけて説明するということはあまり行われているとは言えない。このような文法事項については、家庭教師役を担う大学生が、日頃の大学における研究成果を発揮し、きめ細かい指導をすることが可能な分野であるといえる。そこで、前置詞に焦点をあてた英作文におけるコラボレーションについて、このセクションでは詳しく報告する。

[1] 当該英文法項目の教員による大学生への説明

第一段階として、大学生に対して教員による文法項目の説明があった。この説明は、前置詞一語をとりあげるのではなく、近接する類似義語との違いを英語学的見地から説明することを通して行われた。具体的には、場所を表す3つの前置詞 (at, in, on) に

ついて詳細に考察をしている Herskovits (1986)を援用し、まずこれら3つの前置詞の用法を概観した後、それをもとに、日本人の英語学習者が英語の標準的な用法からどの程度逸脱してこれらの前置詞を使用しているかを説明した。

●at

at の理想的な意味は(4)で定義される。

(4) ある地点(point)が別のある地点(point)と一致している。

以下の例が at が使われる典型例である。²

- (5) a. The bottle is at the place where you left it. (ある場所に位置する、空間を占める物体；この例では瓶をさす。)
- b. She likes to spend her vacation at the seaside. (総称的(generic)な場所にある、空間を占める物体；彼女は、海という場所で休暇を過ごすのが気に入っている。)
- c. Professor Hashimoto is at Shindai. (教育機関(institution)などに所属している人物；橋本教授は信大にいる。)
- d. John is at his desk. (人間の技術によって作り出されたものを使用している人物；ジョンは書き物をしている。)
- e. There are bubbles at the surface of the water. (ハイライトされた媒介物(この場合水の集まり)のなかのランドマーク(水の表面)に位置する、空間をしめる物体；水の表面には泡がある。)
- f. The first rest stop is at a distance of five miles. (ある地点、平面などから一定の距離に位置する物体；最初の休憩施設は5マイル離れたところにある。)

これらの例は具体的な使用場面を適宜に分類したものであるが、いずれの用法においても、(4)で述べた条件を満たしている。すなわち、ある地点が人間であれ物体であれ、空間のなかの点として捉えられたものAが、空間の中の別の点Bのところ位置している場合に、A is at B.という表現が典型的に使われていると言える。

●on

on の理想的な意味は(6)で定義される。

- (6) 幾何学的構造物(X)が線や表面(Y)と接している場合；Yが物体 O_y の表面であり、Xが別の物体 O_x によって占められているスペースであって、 O_y が O_x をサポートしている場合

以下の例が on が使用されている具体例である。

- (7) a. the lamp on the ceiling (物体によって支えられている、空間を占める物体：天井のランプ)
- b. the crack on the wall (物体の一部を占めている部分：壁にあるひび割れ)
- c. a dog on a leash (別の物体にくっついている物体：ひもにつながれた犬)
- d. the children on the bus (大きな乗り物に運ばれている物体：バスに乗っている子供たち)

e. the woman on her back (物体で、それ自身の一部分の上にあるもの：仰向けになっている女性)

f. The ceiling lights on the third floor are not working. (地理的な場所に位置する、空間を占める物体：3階にある天井のライトがつかない。)

g. a garden on the lake (地理的な領域の端と隣接している物体：その湖に隣接している庭)

ただし、これらの例のうち、理想的な意味、すなわち支え(support)の意味を反映した用法は a~e である。

●in

in の理想的な意味は(8)で定義される。

(8) 一次元、二次元、三次元の幾何学的構造物の中へ別の幾何学的構造物が含まれること。

以下の例が in が使用される典型例である。

(9) a. the milk in the glass (容器の中に含まれる、空間をしめる物体)

b. the nail in the board (ある物体のなかに「埋めこめれている」別の物体：板のなかに埋め込まれている釘)

c. the muscles in his legs (物体のなかの一部分：足にある筋肉)

d. a man in a blue hat (衣類を身にまとっている人：青い帽子をかぶった男)

e. My son is in college. (教育機関などに属している人：息子は大学に通っている)

この用法が at にも存在する。

これらの例からもわかるように、A is in B. という表現には、なんらかの形で A が B のなかに含まれていることをあらわしている。もちろん含まれるというのは、物理的に A というものが B というものの中に含まれるのではなく、場合によっては機能的な意味において含まれていることを示している。

●間違いやすい用例

前節まで、3つの前置詞の用法を概観してきたが、これらの例からも容易に気がつくように、お互いに意味を区別することが難しい用例が散見される。

(4) f. The ceiling lights on the third floor are not working. (地理的な場所に位置する、空間を占める物体：3階にある天井のライトがつかない。)

この例における on は、前述の通り、隣接や支えといった概念では説明できないものであり、日本人の英語学習者の感覚では、in で置き換えることができると思いがちである。しかし実際には in で置き換えることができないものである。一方、以下の at と in の例はお互いに交換して使うことが可能である例である。

(5) c. Professor Hashimoto is at Shindai. (教育機関(institution)などに所属している人物；橋本教授は信大にいる。)

(9) e. My son is in college. (教育機関などに属している人；息子は大学に通っている)

また一方で、以下の例においては、in を用いる場合と at を用いる場合で、明らかに使われるコンテキストが変化すると考えられる。

(10) a. John is at the supermarket.

b. John is in the supermarket.

簡単に説明すると、(10a)を典型的に用いる場面は、話し手と聞き手がお互いに近くについてかつスーパーマーケットからは距離があるところにいるような場合である。一方、(10b)を典型的に用いる場面は、話し手と聞き手がお互いにスーパーマーケットの中の近い場所にいるような場合である。

以上をまとめると、日本人の英語学習者が前置詞の正しい用法を身につける上での障害には3つの種類があるように思われる。1つ目は、典型的な意味からすると他の前置詞が使われるであろうと思われる場合、2つ目は、複数の前置詞が使用可能であるような場合、3つ目は複数の前置詞が使用可能であるが、使用場面を区別しなければならぬような場合である。

[2] 高校生に出される問題を含む数多くの問題を解き、それを答え合わせする

実際に高校生が解いている問題がどれであるかがわからないようにし、かつ、それら含んでそれらより多い数の問題を大学生が解いて、それに大学教員が答えを示した。こうすることによって、どのような間違いが起こしやすいのか、またどのように指導すればいいのかを体得できるようにプログラムされている。

[3] グループで高校生の英作文添削

グループで添削させた理由は、グループ内で間違いを見つけることができるようにするためである。5人グループで5枚の添削を担当した。

[4] 高校生の英作のエラーアナリシス

最後に、グループでエラーアナリシスを行い、授業中に発表することにより、間違いを分析し、その結果をどう英語教育に応用できるかを体得できるようにプログラムした。

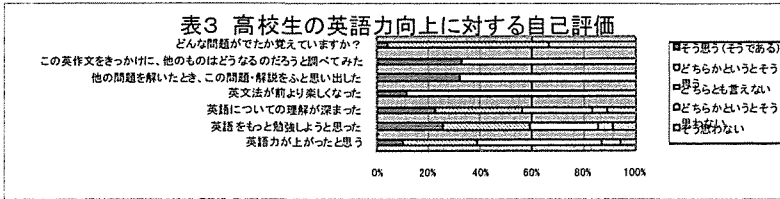
<<結果>>

大学生の英語力の向上にはめざましいものがあつた。(3)の2段階目の時点で、どれくらいの問題が解けたかに対するの大学生の自己申告の平均は、約64.3%であつた。ところが、高校生の間違いを直すという作業を行った後に同じ分野ではあるが別の問題を解いてもらったところ、その正答率は、97%であつた。高校生の間違いを直すことを通して、細かいことにまで気を配るようになったことがよく現れている。

一方、高校生の英語力はどうか。以前から県ヶ丘高校では、2人のALTの方に英作文の添削をやってもらっており、さらに意識の高い学生の中には、お金を払って英作文の添削をやってもらっている者もいる。このことを前提に、つまり英作文の添削はこのコラボレーションにおけるそれが初めての試みではないということ前提としてアンケート結果を見てみたい。すると、この英作文におけるコラボレーシヨ

ンが、高校生の全般的な英語力向上に寄与したことが認められると言えるであろう。

特に注目すべき点は、「他の問題を解いたときに、この問題・解説をふと思い出した」という問いに対して肯定で答えた高校生が多いことである。問題・解説を思い出すことによって、そのときに犯した間違いを繰り返すことが避けられることになり、この点においても英語力向上につながっていると言えるのは間違いはない。



3.2. 授業参観 及び模擬授業

<<期待される成果>>

大学生にとっては、教育実習前に「教える」という立場から高校の授業を見ることのできるまたとないチャンスであり、第2章でも述べたとおり、教育実習を経験した多くの学生が一様に感じる、「初めて教育実習に行くこととまどいを覚え萎縮してしまう」という不安を解消するのに役立つであろう。また、教育実習に行く前の年（学生によっては2年前の年）に実際の授業を見学することにより、教育実習、ひいては教職に就いたときの教案作りに大いに役立つであろうと思われる。

高校生にとっては、授業を参観されるだけでは何の得にもならないだろうが、高校教員にとっては、教えるということが初めての経験である大学生に対して、手本を示すという新たな経験をすることになると思われる。

<<このコラボレーションの工夫>>

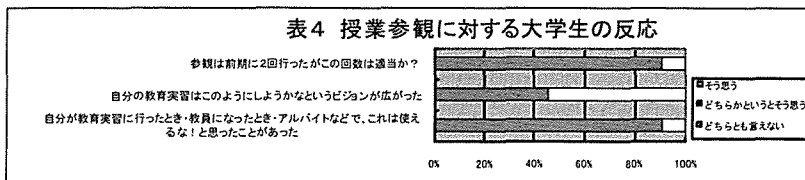
ただ授業を見に行くだけでは受身の経験になってしまうので、その経験をした後、見学した授業のいい点と悪い点を必ずインターネット上に書き込ませるようにした。それに対して高校の教員がコメントをつけるというシステムになっている。

この一連の行為を通して、大学生は見学する授業に対して、ただ「見学」するだけではなく、この教え方は盗もうなどと積極的に授業参観を「経験」するであろうし、また、彼ら自身の目から見た悪い点を必ず一つは書くことにより、ただ盲目的に感嘆の声をあげるだけでなく、自分が教壇に立つ際にはどうなのか、と客観的かつ批判的に見る目が育つであろうと期待されている。また高校教員にとっては、高校生ではない学生からの斬新な意見を聞くことが契機となって、自分の教案を見直す機会が生まれることにもなるであろう。

〈結果〉

大学生にとってこの授業参観は、この上なくいい経験になったようである。教育実習に行った際にどのようなことをするのかということが具体的に描けるようになったようである。一人の大学生のコメントに、「教師が一生懸命なら、生徒も一生懸命になる」ということを書いた学生がおり、ますます教職に就く楽しさと責任を感じて人間的成長をした学生が多かった。

このコラボレーションが大学生にとってとても有意義な経験だったことは、アンケート結果が如術に表している。



また高校教員にとっては、高校生ではない学生からの斬新な意見を聞くことが契機となって、自分の教案を見直す機会が生まれることにもなった。長年教員をやっているも、常に試行錯誤を繰り返してより良い教育法を日々模索しているわけで、その中で、大学生生活を通して大学教員の考える英語教育の理想型を教え込まれた学生の意見を通して、間接的ではあれ、大学教員が考える理想型を垣間見ることができたのは、高校教員にとって大いなる刺激であったと言えるだろう。

3.3. 出前授業

〈期待される成果〉

このコラボレーションは、多くの高大連携が目標としているものが成果として期待される。

つまり、大学側としては、高校サイドに大学を知ってもらうという広い意味での入試広報活動の一環として位置づけることができ、また高校と連携することにより、高校生の実情や大学教育への期待を大学側が知り、そこで得られたものを大学教育活動の改善に生かしていくことができる。

一方高校サイドとしては、近年、英語は技能教科として定義付けられる傾向もあり、地味な訓練的な活動が教育活動のかなりの部分を占めている中で、日常の技能訓練とは違って学生の「知的好奇心」を刺激し、学ぶことの喜びを与えることが期待できる。

〈このコラボレーションの工夫〉

高校生が大学の授業を受けることが有効であることは、これまでの様々な高大連携の取り組みで明らかなることである。しかしながら第2章で明らかにしたとおり、これには3つの問題点が存在する。すなわち、(1)高校生は、高校の授業が終わってから参加することが多いので、放課後あるいは土曜日に大学の授業を受けることになるが、放課後は完全学校週5日制の実施に伴い時間割に余裕がないために参加が難しいし、土曜日は部活動を行っている学生は参加しにくい。(2)高校への出前授業は、大学教員と高校教員との個人的なつながりによるボランティアで行われていることが多く、従って結果的にごく一部の教員に負担が集中し、かつ、高大連携事業に参画

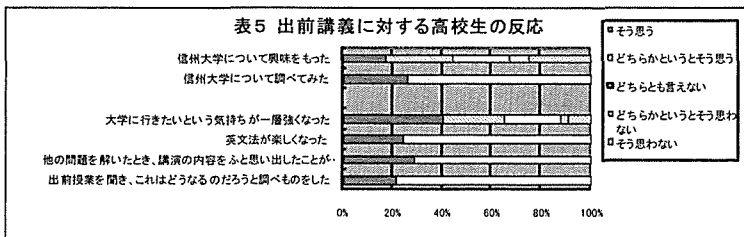
する大学教員に対する大学からの評価が低いために、事実上ボランティア活動になってしまうことが多い。(3)従来型の高大連携は高校生の学力向上が主眼になっており、そこには大学生の学力量向上を目指すという視点が欠けている。

このコラボレーションの工夫としては、上の3つの問題点を解決すべく、出前講義を高校の授業時間の中で(1)の解消、大学生の教育を高校側にも手伝ってもらった見返りとして大学教員が行ったという点が挙げられる、これにより、(1)~(3)の問題の一応の解決をみたと言えるであろう。

<<結果>>

出前講義は、2回に渡って行われた。大学の授業とはどのようなものであるかを知ることができ、高校生には大いに刺激になったようである。

以下がそのアンケート結果である。



印象的だったのは、1回目の出前講義の後でのアンケートで、次も来てほしいと多くの高校生が感想に書いたことである。大学の教員が直接高校生に語りかけることで、彼らに多くの影響を及ぼすことができると実感できた。

3.4. 大学生による、高校生に対する進学相談

<<期待される成果>>

進学相談は、高校生にとって大きな利益になると思われるが、大学生にとっても、人間的成長を大きく促されたコラボレーションとして位置づけられる。大学生にとっては、自分たちより若い世代に接することで急速に責任感を身につけていき、上述の関西大学高大連携運営委員会委員長が言うとおおり、「年少者を世話することで自分の成長の過程を振り返り、年長者として自覚し、自分自身の今後に目を振り向ける契機である。そこには学生を大学の内部に囲い込むことでは得られない教育効果がある」ことが期待される。

高校生にとって利益があるのは明らかである。表1で明らかなおおり、先輩からの体験談は、大学・学部決定時に大きく影響を及ぼす要因であり、その要因によって進学先を決定した者は、大学の満足度が大きいことが報告されているが、この進学相談はまさに、この生の体験談を直に1対1で聞くことのできる貴重な体験だったはずである。

<<このコラボレーションの工夫>>

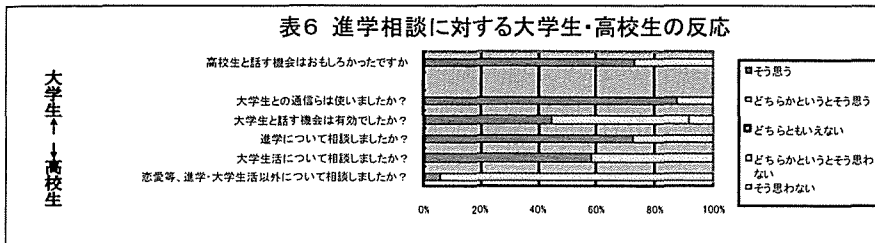
このコラボレーションで工夫した点としては、英作文のコラボレーションの中に組み込んだと

いう点が上げられると思う。英作文の添削をする際に、プリントの下部40%を大学生と高校生の通信欄にあて、高校生に大学生に対する質問等を書いてもらい、それに対して大学生に答えるという形をとった。

この工夫をした結果、英作文のコラボレーションに参加しない高校生にはこの進学相談コラボレーションに参加できないという弊害はあるものの、以下の2点において功を奏したといえよう。つまり、(1) (第2章で明らかにした高大連携の問題点にあるとおり) お互いのいる場所に出かけていくには、互いに時間の都合をつけなくてはならないなど、負担が大きくなるが、紙上で相談をうけるのであれば、互いの時間のあるときに相談をし、相談に答えることができる。(2) メール世代の学生にとっては、顔をあわせて直接聞くより、文字で聞くことにより、顔と顔をあわせて聞くには恥ずかしい質問もできたのではないかと思われる。

<<結果>>

このコラボレーションは、大学生・高校生ともに、肯定的にとらえているようだった。



特に印象的だったのは、この進学相談についての自由意見を述べるアンケート項目に対しては、とても回答が多かったことである。このコラボレーションに対する意識が強かったことを示しているといえよう。

大学生の回答については、「現役の大学生だからこそ答えられることがあるだろうからよかった」、「高校生はまじめに進学を考えているようで自分も将来についてまじめに考えよう」といったような、責任感と自己反省の色が見えるコメントが多かったことが特徴としてあげられる。これは、このコラボレーションが意図していた大学生の人間の成長を促進することができたということを示しているといえるであろう。

高校生は、学年があがる毎に、進学・受験勉強についての質問が多く、このコラボレーションを有効に使っていることが伺えた。回答の中には、「大学生が熱心に答えてくれたのががんばろうと思った」や、「すべてのコメントが印象に残っている」「視野が広がった」などこのコラボレーションが有効であったことを示すものが多く、中には、「英語科に進む人しか質問できなくて残念」(答える大学生が英語学専門の学生が多いので)と、違った分野を専攻する大学生に対して質問を試みたかったということを表す回答もあった。

4. 結論と提言——大学教育の質を高めるための高大連携のあり方——

以上、高大連携という視点からみた、信州大学人文学部英語学分野と長野県松本県ヶ丘高校と

のコラボレーションの報告をした。本稿では「接続教育」ばかりに主眼が行く高大連携がもつ問題点を解決しようとするような双方向型高大連携を提案し、その取り組み例を報告したわけだが、その取り組みは、さらなる改善が必要なものの、一応の成功をみたといえよう。

このような双方向型高大連携の取り組みは、大学と高校等とが「共に」若い世代を育てる組織として実際に効果を挙げている具体例である。これは、学年で輪切りにし、それぞれの段階を、ある母体だけが責任をもって行うといった取り組みではなく、教育機関が「共に」手を携え若い世代の教育を行っていると言えよう。

一方、大学教育の質を高めるという視点から見てもこの連携の持つ意義は非常に大きいと言える。とりわけ高校教員になるための資格取得を目指す学生にとって、現場の高校生を直接指導できる機会を在学中に経験することで、自らの「価値」を高めることが可能になるのは間違いない。

実際にこのコラボレーションが新聞・テレビ等のメディアで取り上げられた後、信州大学人文学部英語学分野には、卒業生から英語教員を紹介してほしいという問い合わせを数件いただいた。その際、このようなしっかりした教育を行っているところから英語教員をとりたいたいというありがたいコメントも頂戴した。このことからみても、学生自身の「価値」を地域社会が認めているのは間違いない。

このように我々の試みは、高校側だけでなく、大学側にとっても、とりわけ大学教育の質を高めるために非常に有効であることがわかったと思う。今後も双方向型高大連携のなかで大学教育を実践していくことが不可欠であろう。

注

* 本稿は、花崎美紀・杉山・花崎一夫・橋本(2006)および花崎美紀・花崎一夫・橋本・杉山(2007)に加筆修正したものである。

¹ この要因と満足度には必ずしも因果関係があるとはいえない。というのも、表1の上の6要因は、その要因を受け学生自身が判断し、つまり、学生自身がアクティブに起こした行為であるのに対して、下の3要因は、受動的に起こした行為といえる。そして、心理学の理論で明らかにしている通り、人間の心理としては、自分で起こしたアクションに対してはなかなか否定的な立場をとりにくいものであるからである。しかしながら、本稿は、その因果関係を問題とするものではなく、高校生の大学・学部選択の際にどういった要因(チャンス)が関係するかを問題にしているわけである。表1では、高校生が選択する際、一つでも多くの情報を与えることが有効であることが示されている。そこで本稿では、学部説明会や出前授業は、学生が自らの意志で選択するために必要な情報の一つでも多く与えることができるという意味で有効であるという立場から、学部説明会・出前授業等は、積極的に行われるべきであると考えている。

² Herkovits(1986)で挙げられているものの中から、筆者が典型的であると判断したatの用法を取り上げている。

参考文献

- 品川哲彦(2006)「若い世代をともに育てる組織として一関西大学の高大連携のスタンス」『大学と学生』25号、日本学生支援機構編、第一法規、2006年3月10日、13-20頁。
- 花崎美紀、杉山祐二、花崎一夫、橋本功(2006)「地域価値を高める双方向高大連携の試み」『地域ブランド研究』2、145-168頁。
- 花崎美紀、花崎一夫、橋本功、杉山祐二(2007)「内発的動機付けを高める大学生の英語教育のあり方：高大連携を用いた取り組み」『人文論集』第41号、37-44頁。
- 福岡忠彦(2002)「高大連携と学生満足度 第1回：一高大連携の推進状況に関するレポート」ベネッセ

教育開発研究センター。

- 堀野緑・市川伸一(1997)「高校生の英語学習における学習動機と学習方略」『教育心理学研究』. 45. pp.140-147.
- 淵田 良男(2004)「九州大学高大連携の趣旨」『16年度地域貢献特別事業 高大連携シンポジウム：高校と大学の教育連携—大学生からみた高大連携の課題 報告書』九州大学高大連携推進専門委員会。
- 増子 繁治(2002)「学力向上を目指した高大連携プログラム等のあり方について」『学力ファースクールの研究』千葉県教育総合センター <http://www.ice.or.jp/~fhs/makusou.pdf>。
- Calder, B.J. and B.M. Staw (1975) "Self-perception of intrinsic and extrinsic motivation" *Journal of Personality and Social Psychology*. 35. pp. 459-477.
- Herskovits, Annette. 1986. *Language and spatial cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Loveland, K.K. and J.G. Olley (1979) "The effect of external reward on interest and quality of task performance in children of high and low intrinsic motivation" *Child Development*. 50. pp. 1207-1210.
- Markus, H. and P. Nurius (1986) "Possible selves" *American Psychologists*. 41. pp. 954-969.
- McLoyd, V.C. (1979) "The effects of extrinsic rewards of different value on high- and low- intrinsic interest" *Child Development*. 50. pp. 1010-1019.

(信州大学 全学教育機構 准教授)

(信州大学 人文学部 准教授)

2008年2月12日 採録決定